

森田欣也の滑稽俳句（一）

小西昭夫

ぼくが最も注目している滑稽俳句の書き手は森田欣也さんである。

油虫三人分の足があり

これが最初に注目した森田さんの句である。人間には二本しか足がないが、あの嫌われ者の油虫（ゴキブリのこと）には六本、人間にして三人分の足があるというのである。人間と油虫を同列に扱っているところも可笑しいが、あの油虫には人間の三倍の数の足があるとは笑わせてくれるではないか。

しかし、森田さんは最初から滑稽句としてこの句を書いたのではないだろうと思っている。実は、森田さんは高校三年生の時、花園をめざしたラグビーの試合で第三頸椎を脱臼骨折し、首から下が全く動かなくなったのである。もちろん、自分で歩くことはできない。懸命のリハビリの結果、補助具をつけて何とか文字を書くことができるまでになったが、自分で歩くことはできない。車椅子生活であった。

油虫の句は、ぼくが選をしている愛媛新聞の俳句欄に投句してくださった句である。実はぼくは教員をしていたのだが、森田さんが負傷した二年後にその高校に赴任しラグビー部の顧問になった。それで、お会いしたことはなかったが、森田さんのことを知っていたのである。

ただし、今もそうだが、ぼくは基本的に俳句の選にあたっては作者の境涯を考慮しないことを心掛けている。

青芝や我にも足が二本ある

境涯を考慮すれば、油虫やこの句は森田さんが思うにまかせぬ自分への口惜しさや苛立ちを詠んだ句と読むべきであろう。そう読めないのは想像力の欠如だといわれればそれまでなのだが、森田さんの境涯を知らない読者にも、これらの句は滑稽句として面白く読めると判断できるものである。

それは森田さんの作句意図とは全く異なったものだったかもしれない。しかし、森田さんはそこから滑稽ということ在意図的に選び取って行ったように思えるのだ。

淡雪や日本生まれのアフリカ象
夏近しミニスカートの長さほど
竹婦人浮気は決していたしません
大脳の中に飛び込む蠅二匹
暑さにも松竹梅とありにけり
当番でなければ草取りなどはせぬ
T・N氏カツラ外して涼みおり

これらの句からは、森田さんが積極的に滑稽を選び取った思いが感じられるのである。